

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370500245		
法人名	医療法人社団 きのこ会		
事業所名	笠岡市炉端の家		
所在地	岡山県笠岡市吉浜1399		
自己評価作成日	令和 4 年 2 月 10 日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action_kouhou_detail_022_kani=true&jiyosyoCd=3370500245-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 One More Smile		
所在地	岡山県玉野市迫間2481-7		
訪問調査日	令和4年2月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者の状態は要介護①～④で、年齢も高齢化しているが、一人一人の入居者の状態に応じて柔軟に対応をしている。中でも食事については、その方に応じた食事形態、食事・水分量の把握、食事パターンを考えて提供している。食事のバリエーションも多く入居者の好みや希望も取り入れ食事をおいしく、また楽しんでもらえるように力を入れている。長期間になっているが新型コロナウイルス感染防止対策を継続し入居者、職員の健康管理を行っている。

平成8年5月、介護保険制度以前に、笠岡市ときのこエスポール病院が共同で作った全国で初めてのグループホームが「笠岡市炉端の家」であり、その歴史は25年余りと長く、パイオニア的な存在である。平成23年からは笠岡市の指定管理を受けてきのこエスポール病院が運営主体となっている。地域に開かれた施設として地域交流にも力を入れており、地元の金浦中学校吹奏楽部演奏会を開催したり、笠岡市の協力を得て地域講演会を開いたり福祉の拠点としての地位を確立してきた。しかし、その盤石の地位も新型コロナウイルス感染症拡大の脅威にさらされ地域交流を縮小又は休止している状況である。その中にも9名の利用者さん達は、「ここが、心地よく楽しく生活できる場となるように！」という理念のもとに手厚い職員のケアを受けて笑顔で穏やかに暮らしている。決して与えられることのない理念が今後も継続され今以上に素晴らしいホームとなるよう期待している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念、法人内のグループホームの理念を法人のグループホーム部会で確認し、職員の目に入るところに掲示している。ホームの理念も引き続き掲示し、理念を踏まえて日々のケアに取り組んでいる。	「利用者の声を聴く」「地域社会へ貢献する」「利用者個人を尊重し尊厳を守る」等々のきのこグループの理念は、数々の記録や職員のケアの様子を見ても確実に実践されていることが分かり、利用者向き合う事を大切にしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナの影響で地域交流行事が出来ていない。近所の方が畑を貸して下さり、野菜や果物の収穫をした。地域の方も畑のことをきにかけて下さり、コミュニケーションをとったり、畑の作業を協力して下さる関係ができています。	地域に開かれた施設として長年培ってきた地域との交流もコロナ禍のため中断を余儀なくされているが、近所の人から借りた近くの畑「きのこ農園」に様々な季節の野菜を作り、法人の「きのこ保育園」の園児たちが芋堀りやとうもろこしの収穫に来てくれ、利用者との交流もある。	コロナ禍により、これまでの地域との交流がなにもかもストップするのではなく、今出来る事を大切にご近所とお付き合いを守りながら、更なるステップに向けての工夫や検討を期待している。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナの影響で地域との交流ができず出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルス感染防止のため、運営推進会議を中止した。二か月ごとに開催中止の届けを笠岡市に提出している	地域交流会として、活発で有意義な運営推進会議を展開してきたが、コロナ禍にあっては参集又は書面での会議が開催できず、笠岡市に新型コロナウイルス感染症拡大防止のためとして自粛(中止)の報告書を提出している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	入居に関すること、車両のこと(公用車の扱い)など分からないことは笠岡市へ連絡し相談している。年度終了後に事業報告を提出し取り組み状況を伝えている。協力関係はできている。	笠岡市から指定管理を受けて母体病院が運営している「炉端の家」は、これまでも何かと市へ相談や報告をしたり連携を取り合う事が多く密接な関係にある。また、市主催の種々の研修にもよく参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	引き続き、利用者が安全に安心して生活ができるように見守りや環境面の整備、玄関と居室2部屋にセンサーを設置している。身体拘束廃止の指針をもとに職員間で共有し日頃のケアに取り組んでいる	年間研修計画表からも、身体拘束適正化や虐待防止のための研修を指針に基づいて定期的に行っている事が確認出来、職員間で意識の統一を図りながら日々のケアに活かしている。また、外が好きな人には、畑仕事や散歩等、積極的に気分転換を図れる支援をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	ホーム内で職員間で勉強会をしたり、ヒヤリハットの記入、入居者に虐待が疑われるような行為がないか、職員間で話をし虐待防止に取り組んでいる。入居者の対応が難しい場合は、その都度話し合いをし職員が抱え込まないよう気をつけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護については研修が出来ていない		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者は契約前に、家族から話を聞いている。契約時にも、管理者が家族へ説明し、話を聞いている。契約時、それ以外でも管理者が説明を行い、納得して頂けるようにしている。今年度は新規契約2名あり。入居前に利用者の方に会いに行き本人さんの思いを把握するようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナの影響で年3回の家族会が中止、面会が中止になったり、状況によりガラス越しで面会となり家族の意見を聞く場が少なかった。家族へ年数回手紙を出したり電話で状況を伝えている。家族から意見があれば記録へ残している。	運営推進会議や恒例になっている家族会がコロナ禍で中止となり貴重な家族との意見交換や交流の場が無くなったのは残念だが、出来る限り状況報告をしたり、意見や提案を随時聞いて運営に反映するように努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者はいつでも相談ののって下さる。管理者は、日頃から職員の相談、意見にいつでもものようにしている。時間がある時を利用して意見交換をしている。困ったことや大きな事故が心配される時は、緊急ミーティングをし職員の意見をきいてサービスにつなげている。	母体病院の理事長の定期的な往診もあり、適宜運営に関する提案等も気軽に相談に乗ってもらえる。連絡ノートで職員間の情報共有したり、日頃から随時ミーティングをしているので、お互い忌憚のない意見交換をし合い、チームワークを大切にしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	必用におうじて連絡をしたり、理事長先生に相談するようにしている。コロナ禍の対応で職員が休むこともあり勤務体制に支障がでることもあるが勤務を調整したり休憩をとるなどで対応している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内で炉端の家の活動を紹介をする勉強会があった。職員が写真や映像をいれて作成し発表した。法人の勉強会があれば職員が参加をした。外部の研修はケアマネ研修のみだった。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は、回数は減ったが、きのこグループホームの管理者部会へ参加したり、必要時にはいつでも連携をとっている。内容を職員へ伝え、サービスの向上に役立てている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今年度は新入居は2名。入居前に本人さんに会いに行き思いを聞くようにして安心して入居が出来るように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の話を聞くようにしている。少しでも安心して入居が出来るようにしているが、コロナの感染防止対策で以前よりじっくり家族と関わる時間がすくないので関係作りが難しい。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前に管理者やケアマネは本人や家族と会い必要な支援のための情報収集を行うようにしている。入居日からケアプランをもとにサービスを開始できるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人さんとコミュニケーションをとりながら、本人さんが話す言葉を記録に残したり、出来る事をしてもらいながら元気で過ごして頂けるよう関わる様にしている。コロナ対応で職員が忙しい時、洗濯物をたたんだり協力して下さるので助かる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ対応で家族と関わる機会や時間が以前より減っているが、電話などで状況を伝えたり、窓越し面会で本人さんの様子を見て頂き少しでも安心して頂けるようにしている。家族に手紙を送る際に写真を添えて一緒に送ることもある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナの影響で外出、買い物へいかれず、地域交流の中止、直接面会が出来ないなど生活に制限があった。家族へ電話で話したり手紙で近況を伝えるようにした。	コロナ前は毎週のようにあった家族の面会も、感染防止のため制限をせざるを得ず、以前より回数は大幅に減ったがガラス越しの面会は出来、息子夫婦が孫やひ孫と面会に来てくれる人もいる。親戚の人の面会もあり、馴染みの関係を大切に支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	居間で食事をしたり、くつろぐことが出来るので、利用者同士が声をかけあい、交流できている。利用者同士が助け合う場面もあるが、時に口論やトラブルになる時もあるので、職員は見守りながら対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後、法人の病院へ入院された方には、様子を職員に聞いたり会いに行くこともあった。退去が決まった家族から、「よくしてもらった」「充分です。感謝しています。」「楽しかったです。」と電話を頂いた。家族と退去後の事についても電話で確認した。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	「何か手伝いがある」「こういうのがうれしい」など利用者から出る言葉や思いを大切に記録に残している。本人らしく生活できるように職員も取り組んでいる	最近ケアハウスからこのホームに入所したAさんの趣味は卓球。テーブルを卓球台にして今日も職員と手合わせをしていた。利用者の中にはまだまだ元気な人がいて利用者同士で楽しむ事も多いと聞く。役割や生きがいを持ってもらい心地よく楽しく生活できるように心がけている。	令和2年3月作成の目標達成計画「入居者の方の人生歴をよく知り、日頃のケアに役立てる」は、記録を見る限りよく把握していると思うが、新しい情報が入れば追加記入してもっと内容を充実させていって欲しい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人に聞いたり、ミーティングやカンファレンスの中で話し合いを行い情報を共有するようにしている。家族会や面会の機会がほとんどないので情報収集が難しくなっている。軽度の認知症の方は本人さんから情報収集することも多い。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常記録を残し、変化があれば職員間で意見交換をしている。情報の共有を行い、一人一人にあわせた対応が出来るように取り組んでいる		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネはカンファレンスで職員全員の意見や考えが反映されるよう事前にコメントをもらいカンファレンス、ケアプランを作成している。新しい入居者は自分の思いを伝えられるので一緒にケアプランを考えている。職員が共有できるように確認してもらうようにしている。	一人ひとり思いや希望があり、性格、趣味、嗜好等にも個性があるように、ケアプランも画一的にならないように本人の意向を踏まえてその人らしく生活出来る支援を提供するようにしている。また、モニタリングを定期的にして現状に即したケアプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々のケアの中で失敗した対応や苦労したこと、気づきや工夫したことなども書くようにしている。記録を通じて職員間で情報共有し、ケアで戸惑いをなくすように気を付けている。記録が多くなりすぎているので記録の書き方について何度も話をした。本人さんの言葉を大切に記録に残している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状況の変化があった時や変化が予測されるときには職員間で話し合い、その状況に対応できるようにしている。また、ホーム内で解決できないことは、家族に相談し協力をお願いしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナの影響で地域交流は出来ていない。近所の方に畑をかり、近所付き合い程度の交流はある		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎月1回、母体のきのこエスポール病院の理事長先生の往診がある。協力病院へは、職員が付き添いを行う。他の病院への定期受診は家族が付添いをして下さる。	従来のかかりつけ医を受診する人もいるが、大半は母体の病院を受診している。医療連携体制加算をとり、母体のきのこエスポール病院の看護師との連携や作業療法士の訪問指導の他、訪問歯科、歯科衛生士による口腔ケア等、医療と介護の連携がよく出来ており安心である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	何か困ったことがあれば、協力病院の外来看護師がいる時間帯には、連絡を取り、状況報告、相談をしている。毎月の往診時にも相談している。その他は協力病院と連絡をとれる体制は整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力病院へ入院した場合は、職員が様子を確認に行き、担当医や病院の職員と話をして情報交換した。他の病院については、電話で状況の確認をした。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用者の身体状態を見ながら、管理者が家族と今後のことについて、相談するようにしている。主治医に相談を行い、ホームとして、その方の今後の方針を決めるようにしている。高齢になってきているので、重度化している場合、管理者は、職員とホームの受け入れ体制について話をすすめている。	重度化したり医療が必要となった人は他施設や医療機関への入院となるので、近年ホームでの看取りはないが、看取り介護加算や看取りの研修はしているので、本人・家族の希望があれば受け入れる体制はある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員、利用者、関係各所の連絡先、緊急時の対応についてのマニュアルを一つのファイルにまとめている。コロナ対策のマニュアルや入居者、業務の内容についてもファイルにまとめている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	現在、3日分の食料と水を備蓄している運営推進会議はできなかったが、地域との協力体制はある	年数回避難訓練を実施しており、移動介助が必要な方の救助の仕方や災害訓練では水害・土砂災害等を想定してシミュレーションをした。また、2ヶ月前には消防署員による消防査察もあった。現在、隣接する笠岡市認知症介護研修センターの宿泊棟を避難場所に出来ないか検討中である。	この地域は海拔0メートルであり、災害時には母体のきのこエスポール病院に避難する事になっていると聞いているが、西日本豪雨の時には下の道路が冠水した経緯もあり、防災計画の見直しを期待している。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員間で情報を共有し、引き続き、利用者の思いを大切にし、利用者一人一人に合わせて関わるようにしている。対応に慣れない職員にはその都度、職員間で話をしたり管理者と話をし振り返りをしている。	きのこグループ理念にも「利用者個人を尊重し尊厳を守る」の項目があるが、自尊心や羞恥心に対しても言葉遣いや排泄・入浴時等のケアに対して細心の注意を払うように心がけている。各居室にトイレ・洗面台が設置されているのでプライバシーはよく保たれている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	コロナ対応で生活に制限はあるが、本人さんが楽しみにしていることを本人さんから聞いたり、言えない方には状況や本人さんの様子から判断して対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人のペースで過ごしてもらえるように対応しているが、その人らしい生活について日々、職員間で思いが違うこともあり職員も悩みながら対応を考えている。カンファレンスで一人一人に合わせた対応を検討し実践するようにしている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に、訪問カットを利用。馴染みのある美容師さんにカットしてもらっている。衣類は家族と相談し、その人に応じた物を選んでいただいている。身だしなみには気を付けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の誕生日や季節の行事には、日常の会話で利用者の希望を取り入れている。利用者と一緒に、食事作り、片づけをしている。出来る事を探して、入居者の力を引き出すように関わっている。『おいしい』『うわ、きれい。おいしそう』などを大切にし食事を楽しんでもらえる工夫をしている。	いつもの光景であるが、エプロン姿のBさんの野菜を刻む包丁の音が調理場から聞こえてくる。職員との言葉の掛け合いも楽しそう。表情も生き生きとして、「だって、いつもしてきた事だから」と主婦の顔になる。ミキサー食や刻みの人にはその人に合った硬さや大きさが写真やメモで共有化されている。コロナ禍の為、食事は別室で頂いたが、皆さん完食のようだった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養スクリーニング加算で半年ごとに栄養状態の確認をしている。一人一人の状態に合わせた食事形態、水分摂取の方法、食事、水分量を検討、実施し、食事、水分量の把握をしている。往診で主治医へ栄養や水分量について相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	コロナの対応で毎月、衛生士さんの口腔ケアが利用できていない。口腔内のトラブルがある場合は訪問歯科へ連絡、対応している。モーニングケアやナイトケア時、口腔ケアを行っている。口腔ケアを嫌がり毎回できない人もいる。できる時にしてもらっている。職員も意識をもちケアをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ぎりぎりまで歩いて自室のトイレへ案内した方は、現在布団でオシメ交換を行っている。一人一人の排泄状況、パターンを試供品などを利用し検討し対応している。コロナの影響でテーナが使えず、オシメ交換の回数や時間を変更しないといけない方もいる。	各居室にトイレが設置されているので尿意のある人は自室に帰って排泄するが、殆どの人は紙パンツにパットを併用している。タイミングを見計らい声かけ誘導をして自立支援を促しているが、重度化が進み座位でトイレを使用出来ない人もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者の身体状態に合わせて、水分補給や排便を促す食べ物を取り入れている。記録に残し、下剤の服用、量や服用時間の調整をしている。便秘が強い方には、往診時、主治医に相談したり、随時外来の看護師に相談し対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の拒否や興奮される方もいるが、怪我のないようタイミングをみて入ったり職員間で協力し、できるだけスムーズに入浴が出来るようにしている。一人で1時間入られる方もいるので安全に気をつけ見守りをしながら対応している。身体的に重度になり職員二人の介助が必要な方もいるが浴槽に入れるよう対応している。元気な方は一日おきに入られている。	以前は本人の希望により毎日お風呂に入る人もいたが、現在は週2～3回を基本にしている。シャワー浴、二人介助の人もいるが、殆どの人は浴槽に跨いで入る事が出来、風呂好きな人が多いので職員とのお喋りを楽しみながらゆっくり入浴してもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日々の生活状況を把握し、夜間入眠出来るように生活リズムを整えるように関わっている。夜間影響がない程度に、様子を見ながら、自室での休息も取り入れている。睡眠リズムを整えたり、スムーズに入眠できるように眠剤を服用している方が2名いる。家族にも夜間の様子を伝える様にしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤関係は、日常記録のファイルにはさんで、いつでも確認できるようにしている。毎月ファーマシーセと薬局の訪問により、薬に関するアドバイスが受けられている。薬剤管理指導報告書も参考にしている。ケアマネが対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	気分転換できるようドライブや畑へいったり、台所の手伝いや日常のちょっとした作業などをお願いして出来る事を維持できるよう関わっている。自室やホールで自分の好きなことをして過ごす方もいる。ある入居者は入居後、楽しみにしていた卓球が続けられるよう時間を作り職員は対応している		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナの影響で買い物へ行くことが出来ない。ドライブや散歩へ行き気分転換を図っている。介助がいる方は病院へ行く以外、外へ出ることがほとんどなかった。ひなたぼっこをしてもらっている。	暑い夏や寒い冬の外出が減るのは致し方ないが、近年はコロナ禍により外出を控えている。昨年から借りている畑の草取りや収穫等を出来る人には手伝ってもらっており、外気浴や日光浴始め良い気分転換にもなっている。受診の為の外出、ドライブ、散歩等少しでも非日常を味わってもらうように努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	認知症の進行により、金銭は職員が管理をしている。品物により家族に相談し、職員が買い物を代行することもある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っていた方が1名いたが家族から電話があるので、お部屋で話をしてもらっていた。コロナ対策で面会出来ない時もあり、職員が家族に電話をし利用者とかわかって話をする機会が多かった。家族へ手紙を送る際は写真を添えて送った。近所の方に写真を見せたよと家族から喜ばれた。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	四季折々の季節、イベントを感じてもらえるように利用者と協力してインテリアし、利用者にも張り合いがもてるように、また、心地よい環境作りを心がけている。照明、音にも気をつけ落ち着ける環境に配慮している。温度、湿度の管理など職員間で統一はなかなかできていない。気をつけている。	リビングからは中庭の花壇がよく見え、四季折々の花が植えてあり、明るい日差しも差し込む快適な環境になっている。ソファに座ってお喋りに夢中の人達や職員と卓球を楽しんでいる人もいて、会話もよく飛び交い、それぞれが日々穏やかに過ごしている様子が伺えた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自分が決めた席へ座る方もいる。利用者がお互いに協力できる席にしているところもある。居間で自分の好きなおところへ座って過ごすことができる。介助が必要な方には、安定した姿勢や安全面に注意している。感染対策で密にならないようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室に、本人の馴染みの物を置いてもらうように家族にお願いしている。家族からの年賀状や家族との写真を飾ったり、自分で作った作品を飾ったり、それぞれの方に合わせた空間になるよう工夫している。月日を重ねますますその人らしい素敵な部屋になっている。	4室あった畳敷きの居室も利用者の身体状況に合わせて洋室に変え、今は2室のみ。築数十年の間に老朽化も進み、居室で快適に過ごせるようにと、トイレ(ウォシュレット)や洗面台等の環境整備も進めてきた。室内も家族の愛情が感じられる居心地の良い環境になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室、身体状態、認知症状にあわせて、安全に過ごせるようベット、机、タンスの配置を工夫し環境整備をしている。事故があった場合は、原因をアセスメントし早急に対処し再発防止にと止めている。家族へも連絡し一緒に考えるようにしている。職員によっては入居者の状況が把握できていないためミーティングで対策を考えた。安全面には特に気をつけるようにしている。		